

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

大阪大学

前期日程

科目

数学(理系)

総括

難易度(昨年比)

難化

昨年並

易化

分量(昨年比)

増加

昨年並

減少

〈総論〉

全く手が出ないという問題はなく、比較的取り組みやすい問題が多かった。

①は計算力が問われる問題であり、最後の最大値を正解することができたら合格が一気に近づく。②は是非とも完答したい。③は見た目ほどには難しくなく、落ち着いて取り組みればある程度は解ける問題であった。④は毎年のように出題されている形式の問題であり、過去問を研究していれば方針は見えてくるはずである。⑤(2),(3)は解答を論理的に記述するのが難しく、しらみつぶしに数え上げた受験生も多かったのではないかな。

〈特記事項・トピックス〉

②は文系との共通問題であった。これで4年連続してベクトルが共通問題として出題されており、昨年と本年は文系を基準に考えても典型的で易しい問題であった。

また、例年通り数学Ⅲの分野は重要であり、ここで一定以上の得点をとることが合格するためには必要不可欠である。

〈合格への学習対策〉

数学Ⅲの分野が重要であることはもちろん、幅広く様々な分野に取り組んでいく必要がある。単に問題を解くだけではなく、なぜそのような解法に至るのかといったことまで踏み込んで考えてほしい。

さらに、入試本番では効率的な解法が思いつかないことも多いが、それでも合わせ切りの計算力も時には必要である。模範解答を眺めて解いた気になるのではなく、必ず最後まで独力で計算をすることを普段から心掛けてほしい。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	範囲	分野・テーマ	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
①	記述	Ⅱ・Ⅲ	微分法	方針は立てやすく微分の計算をするだけである。ただし、最大値の計算がかなり煩雑である。	標準
②	記述	C	空間ベクトル	4点が同一平面上にある条件を用いる典型的な問題であり、最小値の計算も比較的簡単である。	やや易
③	記述	Ⅱ・C	図形と方程式 複素数平面	複素数平面としての要素はあまりなく、最終的には円と直線との共有点の個数に帰着される。その方針に気づけば比較的取り組みやすい。	標準
④	記述	Ⅲ	微分法 積分法	微分法を用いて不等式を示し、それを利用して定積分の極限値を求める頻出問題である。ここ数年と比べると積分の計算力が問われるが、難しいというほどではない。	標準
⑤	記述	A	確率	3つのさいころの目によって定められた有理数が整数となる確率の問題であるが、実質は数え上げる問題である。(1)は簡単であるが、(2),(3)は論理的に解答を作成するのが難しい。	標準

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。